

## 大正ロマン時代の音楽文化 大正琴生みの親・森田吾郎

大正ロマン時代の音楽文化は西欧諸国から洋楽が輸入され世の中に浸透していった時代と言える。

海外の優れた演奏家が来日、国内でも新交響楽団を結成し演奏会を展開した。

この時代を特徴づける一つに楽器産業がある。特に名古屋のものづくりとして木材加工を基盤とした洋楽器製造は、明治期に生まれた新たな産業で、現在でも東海地方が中心的な役割を担っている。

森田吾郎は1874（明治7）年、名古屋芸事を中心地であった名古屋大須門前町の旅館「森田屋」の長男として生まれた。本名は川口仁三郎で旅館の屋号から通称森田吾郎と名乗っていた。

18歳頃から明笛（中国から伝来した横笛）や二弦琴の演奏を日本国内で初めた。25歳の時、明笛一本を携えてニューヨーク、ロンドン、パリ、インド、香港、上海などを一年かけて回り演奏活動を続け、異国の音楽文化のレベルの高さに衝撃を受けた。

日本では学校でオルガンやピアノなどの洋楽器を使い、家庭でも安価に洋楽の復習ができる楽器を造らなければいけないと決心し、大正元年に二弦琴を基本にタイプライターからヒントを得たボタン装置を組み合わせた鍵盤付き弦楽器「大正琴」を完成させた。

大正琴は数字譜による演奏の手軽さもあって日本中に広まっていき、昭和50年代から一人で弾く楽器からグループで合奏を楽しめる楽器に大きく変わり、最もポピュラーな楽器となった。

全国大正琴愛好会が昭和60年に「大正琴発祥の地」碑には「明治45年大須の住人森田五郎氏が八雲琴をもとにして小型で手軽な二弦琴を作り上げた時に重陽の節句であったことから菊琴と名付けられた。この菊琴をさらに弾き易く改良されたものが現在の大正琴の原形と言われております。大正時代大流行したこの琴も、時代の変遷によりその音色もいつしか消え去りました。昭和2年一人の少年がこの楽器のとりことなり以来58年間改良に改良を加えながら、大衆芸能と言われるまでに育て上げてきました。初代菊琴誕生以来本年で、75年を向かへるにあたり、菊琴制作者、森田五郎氏を偲びその功績を顕彰するとともに大正琴の発祥の地を明らかにし後世に伝えんとするものです。（原文のまま）」と記述されている。



### 森田吾郎の略歴

1874	明治7	名古屋大須門前町の森田旅館の息子として生まれる
1888	明治21	一弦琴や横笛（明笛）を演奏
1892	明治25	日本中で演奏活動
1899	明治32	25歳でヨーロッパにわたり演奏活動
1911	大正元	「大正琴」発売、指導法、教材の開発など普及活動に尽力
1952	昭和27	死去
1985	昭和60	大須観音境内に「大正琴発祥の地」碑建立
2012	平成24	大正琴の日制定



参拝客がにぎわう大須観音

出典：森田吾郎肖像写真 金子敦子著『大正琴の世界』大正琴協会、1995、p 21

